

英語学研究における最新の動向をつかむ

『ことばの仕組みを探る 生成文法と認知文法』

原口庄輔・中島平三・中村 捷・河上誓作 著 (英語学モノグラフシリーズ1)

村上 龍弘

英語学分野で(卒業、修士)論文を書こうとする学生が(恐らく)直面する問題のひとつに、自分が関心のある言語現象をどういった「道具立て」を使ってどのように説明すればよいのか、ということがあげられるだろう。20世紀半ばからの言語学研究が普遍性を追求するという目標にある以上、当該領域の論文を書く際には問題となるデータのみならず、それを解決し一般化するための言語理論との両方を研究する必要に迫られる。この一連の活動をどのように進めていくか、その基本的な考え方を学ぶのに役立つのが本書である。

本書は序章に始まり、第1部「音声と語の仕組み」、第2部「文の仕組み」、第3部「意味の仕組み」、第4部「ことばと認知の仕組み」、そして結論「言語研究の展望」という構成になっている。音韻論から意味論へという研究分野の提示の仕方は従来どおりであるが、本書が類書と異なっているのは、単一の言語理論のみに依拠した記述に終わっていないことである。すなわち、表題にある生成文法と認知文法、理論的背景の異なるそれぞれの視点から同じデータをみた場合に、ということが問題になるかということがわかりやすく比較説明されている。こういった本書の立場によって、読者は英語学的思考法を自然と身につけることができるだろう。

第1部では、音声的側面からみた英語らしさについての記述がある。日本語の音との比較により、ややもすると難解になりがちな音声的側面の説明が非常に具体的かつ平明にまとまっている。母音体系、音節構造に関する複雑さの度合いに、日本人が英語を習得する際の困難性がある(1.6「英語が日本人に難しいのは」)という部分は、教室での発音指導で留意すべき点を示唆してくれているように思った。

第2部はいわば、統語論の入門になる。詳細は読者それぞれにひもといってもらうこととして、ここでは10.「生成文法と認知」を紹介しておく。生成文法と認知文法とは、いろいろな面で比較されることが最近多くなってきた。本章では、モジュール、言語習得、統語と意味といった鍵となる概念について、生成文法の理論的立場を説明している。第4部では、同じ概念について認知文法の立場を記述

している部分がある。これらを読み合わせることで、両者の立場がはっきり浮かび上がってくる。原典にあたる前の予備知識として、おさえておくべき部分が多い。

第3部は現代の意味理論と、それらに至るまでの変遷を概観している。Gruberの意味論から、生成意味論、語彙意味論、意味合成(semantic conflation)に関する理論、そして、生成文法の論理形式と意味解釈のインターフェイス関わる問題が取り上げられている。意味合成についての部分では、one's way 構文、結果構文など、語彙意味論の分野でよく取り上げられる話題を例に解説がある。まさに前書きにあるとおり、「意味論の主要な概念を過不足なく概観」しており、この第3部を手がかりに一気に最先端の研究に取り組むことができる。

最後、第4部は認知文法の立場からの記述である。河上(編著)(1996)以後の認知文法における理論的發展を簡潔かつ平易にまとめ上げている。例えば、言語習得に関して、認知文法では生得的な言語能力を認めるものの、普遍文法の役割は最小であり、生まれた後の実際の言語習得過程を重視する(p.168)という紹介がある。先に述べたとおり、生成文法が掲げている様々な概念に対して、認知文法の立場を述べており、両者がどこで異なるかがよりはっきりしてきた。さらに、方法論についてもより明確な方向が見えてきたことが分かる。言語構造を、認知的視点から記述するための構成概念(constructs)が妥当であるかどうかを確認する手順が明らかになった(p.174)。これにより理論の記述力は増していだろう。また、4章「参照点に関わる文法現象」では、二重主語構文、照応代名詞等が参照点により説明されるという記述が新たに付け加えられたことを指摘しておきたい。

全体的なバランスを見ると、本書は非常に優れた入門書であると言える。本書はシリーズ第1巻目ということで総論的性質を持っている。最先端の研究テーマを扱う続刊の発行が待ち遠しい。

(研究社出版、2000年11月、¥2500+税)

(岩手県立黒沢尻南高等学校)